

## 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 3 日現在

機関番号：23903  
 研究種目：挑戦的萌芽研究  
 研究期間：2011 ～ 2012  
 課題番号：23651257  
 研究課題名（和文） 生活権としての「在地商業権」－生態資源の循環性と多様性に着目して  
 研究課題名（英文） Indigenous Commercial Rights for Livelihood with Reference to Diversity and Renewal of Eco-resources  
 研究代表者  
 赤嶺 淳 (AKAMINE JUN)  
 名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・准教授  
 研究者番号：90336701

研究成果の概要（和文）：環境主義の時代とも称される今日、鯨類やマグロ類といった水産資源の管理をめぐる問題など、環境保護が高度な国際政治課題となっている。本研究は、もともと野生生物の利用に依存してきた人びとが、そうした地域資源（コモンズ）を商い、自立する権利、すなわち生活権を「在地商業権」（ICR: Indigenous Commercial Rights）と呼び、ICR概念の精緻化・妥当性を検討するとともに、こうした野生生物の持続可能な利用を保障する制度設計をおこなった。

研究成果の概要（英文）： The present world called environmentalism pays more attention to the protection of marine wildlife such as whales and tunas and marine conservation has become the international political issue. The present study looked into the way of life that people use of the wildlife and they make a living depending on it. This study established the Indigenous Commercial Rights (ICRs) and examined its elaboration and the validity of the ICR concept and analyzed a social system designing to guarantee the sustainable use of such wildlife.

### 交付決定額

(金額単位：円)

|       | 直接経費      | 間接経費    | 合計        |
|-------|-----------|---------|-----------|
| 交付決定額 | 2,900,000 | 870,000 | 3,770,000 |

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：地域間比較研究

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 1970年代以降の現代社会を特徴づけるのは、環境主義の隆盛とグローバリズムの浸透である。多様な環境問題群のなかでも、ゾウ類や鯨類といったカリスマ的野生動物の保護は、そのわかりやすさもあってか、国際的に定着してひさしい。

(2) ゾウ類の管理は1973年に締結されたワシントン条約（CITES: Convention on International Trade in Endangered Species

of Wild Fauna and Flora）が、鯨類の管理は1948年以降は国際捕鯨委員会（IWC: International Whaling Commission）がおこなっている。

(3) IWCは、1946年に成立した国際捕鯨取締条約（ICRW: International Convention for the Regulation of Whaling）の執行機関として設立されたものである。IWCには、2013年3月現在、89カ国が加盟している。

(4) 鯨類にはおよそ 85 種が存在しているが、IWC の管轄下にあるのはヒゲクジラ類を中心とした大型鯨類 14 種である。それ以外の鯨類については、各国の監督下で捕鯨は認められている。また、IWC の決定は加盟国に限定される。よって、カナダなどの IWC 非加盟国は、IWC の決定に束縛されずに捕鯨をおこなうことができる。

(5) 本研究では、IWC 非加盟国であるインドネシア・東ヌサトゥンガラ州・レンバタ島ラマレラ村におけるマッコウクジラ漁に対して、近年、「国際条約違反」とする批判が海外からむけられている。しかし、こうした批判は法的には的外れである。

(6) こうした批判のほとんどは、ラマレラ村民によるマッコウクジラ漁の漁獲が、どのように消費されているかについて考慮していない。東ヌサトゥンガラ州のレンバタ島周辺海域の島々では、鯨肉と綿布、穀類を基軸とした交換経済が貨幣経済と併存しているのであって、地域の人びとが鯨類をふくむ野生生物を将来にわたって利用可能となる「権利」=ICRs を保障する論理を模索・確立することが急務である。

## 2. 研究の目的

(1) IWC の管轄外にある (小型) 鯨類の利活用、ならびに IWC 非加盟国における鯨類の利活用について、日本とインドネシアを事例に実態を把握するとともに、そうした地域における鯨類利用の慣行を ICR との関連で考察する。

(2) 鯨類にかぎらず、さまざまな生態資源の利活用について現地社会の視点から考察し、ICR 概念の深化をはかる。

## 3. 研究の方法

(1) 研究代表者の赤嶺淳は、これまで蓄積してきた「モノ研究」の実績と手法を活かし、NTT 州をふくむ東インドネシア海域の離島群における交換経済に着目し、そうした交換経済で利用される商品目録を作成し、それらの商品のライフサイクル (生産・流通・消費の一連の流れ) についての詳細な記述と分析をおこなう。また、国際捕鯨委員会に参加し、同会議における先住民生存捕鯨 (Aboriginal Subsistence Whaling) に関する議論を傍聴する。さらには、日本国内における小型鯨類の利活用についての法的管理体制を整理するとともに、和歌山県や宮城県、北海道などでフィールドワークを実施する。

(2) 研究分担者の長津一史は、インドネシアの海洋資源省、漁業省、環境 NGO が提起

するインドネシアにおける海洋保護区化構想について、スキューバ・ダイビングなどのマリンスポーツの開発計画を視野にいれながら、政治家ならびに関係省庁、NGO の聞き取り調査を実施する。同様に、ツーリズムの開発が実施されている現場での、開発にともなう社会変容についての参与観察をおこなう。比較研究のため、マレーシアやフィリピンにおける生業経済と海洋環境保護のポリティクスについても調査する。

## 4. 研究成果

(1) 本研究において、ナマコやフカヒレ、極楽鳥、綿布など、ウォラセア海域における生業経済の重要商品群の各種の歴史記録から拾いだし、それらが今日の東インドネシア社会においても必要な商品であることを確認した。

また、レンバタ島におけるマッコウクジラ漁に関するレビューをおこない、その歴史の変遷について、バーター交易や電力普及、モータリゼーション、出稼ぎなどの外部経済要因との関係性で考察をおこない、反捕鯨の批判が表面的なものにすぎないことを明らかにした。

IWC63 (於英国ジャージー島) と IWC64 (於パナマシティ) に参加し、IWC における先住民生存捕鯨の議論の参与観察をおこなった。とくに IWC64 では先住民捕鯨枠の改定がおこなわれ、グリーンランドのイヌイトによる先住民生存捕鯨が否定されたことについて、ICR との関係性でイヌイト関係者にインタビューをおこない、画一的な商業性概念の問題点を明らかにした。

和歌山県の太地町において、シーシェパードを中心とする反捕鯨団体が展開する小型鯨類の捕獲反対のキャンペーンを参与観察するとともに、こうした反捕鯨団体の活動の結果、イルカ肉が太地町内で流通しづらくなっていることを確認し、商業性と ICR の関係性について考察した。

東海地方を中心に、戦前期から高度経済成長期における鯨肉食についての記憶を採集し、冊子にまとめるとともに、食生活誌学という概念を提唱した。

また、生活に密着した生業の保障だけでなく、生活の基本である (少数) 言語の保護など、さまざまな文化権・生活権の保障を、より幅広い文脈のなかで検討していく必要がある。

(2) 本研究では、島嶼部東南アジアにおけるフィールド調査の成果に基づいて、海民集団の生成と在地資源の商業利用との関係について考察した。東南アジア海域世界では、沿岸や汀線や河川沿い、つまり陸域と水域の「きわ」が長らく人間の居住に適した空間とされてきた。この生態空間をニッチとし、独

自の生活様式を発達させてきた人びとが本研究でいう「海民」(maritime folks)である。東南アジア研究では、東南アジア海域世界に通底する社会的、文化的な特徴を捉えるための概念として海民という語が用いられてきた。この広義の海民は、東南アジア海域世界の生態基盤、つまり熱帯多雨林が卓越する多島海に発達した典型的な生活様式を措定して、それにあてはまる人びとを指示するための集団類型である。

フィールド調査および考察の主な対象は、この広義の海民集団のひとつとしてのサマ人である。サマ人は、フィリピン南部からマレーシア・サバ州、インドネシア東部に至る広い海域に拡散居住する。本研究では、このうち、東ジャワ州のカングアン諸島に焦点をおき、かれらを様々な民族出自を持つ人びとからなるという意味での混淆の海民集団としてとらえ、その生成過程における在地資源の商業利用の重要性を指摘した。

カングアン諸島のサマ人は、ナマコやウミガメ、ハタ類などの輸出用海産資源の採捕を経済活動の中心においてきた。カングアン諸島周辺の海域は、これらの商品海産物を採捕するための漁場や拠点が持続する海域フロンティアである。本研究を通じて得られたのは、サマ人はこうした海域フロンティア空間にニッチをみいだした異種混淆の海民集団であるという理解である。言い換えれば、商業性はこの海域における民族生成の過程を理解するうえで鍵となる概念だということである。

近年の環境 NGO 等の野生動物保護の思想は、その利用における商業性の否定を特徴のひとつとしている。「伝統的な自給自足」のための野生動物の利用は認められるが、商業目的の利用は規制されなければならない——東南アジア海域においても、こうした政府や環境 NGO の認識のもとで、海洋保護区の制定等による海産資源の保護・囲い込みが進められている。しかしながら、上記のように商業性は、この海域の社会編成、さらには文化的価値観とも密接に関連している。かれらの「在地商業権」ならびに当事者性を尊重するかたちの、海産資源の適正利用の仕組みが求められている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

(1) Akamine, Jun, 2013, "Reconsidering blast fishing within a world system: A civil war and economic development in the southern Philippines," *Journal of Chinese Dietary Culture* 9(1), in print,

査読有.

(2) Akamine, Jun, 2013, "Intangible food heritage: Dynamics of whale meat foodways in contemporary Japan. *Senri Ethnographical Studies*, in print, 査読有.

(3) 長津一史, 2012, 『海民』の生成過程——インドネシア・スラウェシ周辺海域のサマ人を事例として, 『白山人類学』15: 45-71, 査読有.

(4) 赤嶺淳, 2011, 「野生生物保護の問題点——人類共有遺産」の保全をめぐる同時代的視座, 『国立民族学博物館調査報告』97: 265-295, 査読無.

[学会発表] (計 16 件)

(1) Akamine, Jun, "Whale shark used to be food: How it has become an eco-icon representing marine environmental conservation movements in the Philippines," Asian CORE Workshop on Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia, 22-23 February 2013, Inamori Memorial Hall, CSEAS, Kyoto University on February 22, 2013.

(2) Nagatsu, Kazufumi, "*Jalan Tikus on the Sea: Persisting Maritime Frontiers and Multi-layered Networks in Wallacea*," Asian CORE Workshop on Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia, 22-23 February 2013, Inamori Memorial Hall, CSEAS, Kyoto University on February 22, 2013.

(3) Akamine Jun, "Whale meat foodways in the contemporary Japan: From fish sausages in the 1960s to whale tongue dishes in the 1990s," International Conference on Food and Heritage: A Perspective of Safeguarding the Intangible Cultural Heritage, January 3 to 5, 2013, Hong Kong Heritage Museum, Hong Kong SAR on January 3, 2013.

(4) 赤嶺淳, 「ジンベエザメのエコ・アイコン化と観光資源化のポリテクス—フィリピンの事例から」, 生命科学と生態系変容研究会, 伊勢国際ホテル, 2012年11月25日.

(5) 長津一史, 「東南アジア海域研究が拓く可能性——海民論と境域論を手がかりに」, 国立民族博物館共同研究会『アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類

史的研究—資源利用と物質文化の時空間比較』, 国立民族博物館, 2012年11月10日.

(6) 長津一史, 「クレオール海民とその言語実践—インドネシア・カンゲアン諸島のフィールドワーク報告」, 『東南アジアの海とひと第6回研究会』, 東海大学海洋学部, 2012年10月14日.

(7) Akamine Jun, "Chinese foodways vs. marine environment?: A view from trade and consumption of dried marine products in Asia and the Pacific," Asian CORE Program Seminar: Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia on February 28 to 29, 2012, Center for Asia Pacific Area Studies, RCHSS, Academia Sinica, Taipei, on Feb. 29, 2012.

(8) Nagatsu Kazufumi, "Genealogy of the Maritime Creole and its Socio-ecological Settings in Wallacea," Asian CORE Program Seminar: Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia on February 28 to 29, 2012, Center for Asia Pacific Area Studies, RCHSS, Academia Sinica, Taipei, on Feb. 28, 2012.

(9) Akamine Jun, "Reconsidering blast fishing within a world system: A civil war and economic development in the southern Philippines," 12th Symposium on Chinese Dietary Culture, Okinawa Prefectural Museum, Naha, Okinawa, on November 20, 2011.

(10) 長津一史, 「『バジャウ・ラウト』はいかに生成したか—マレーシア・サバ州の境域における自己表象の動態」, 『白山人類学研究会第5回年次研究フォーラム「跨境コミュニティにおけるアイデンティティの持続と再編—東アジアと東南アジアからの展望」』, 東洋大学, 2011年11月12日.

(11) Akamine Jun, "Problems to conserve intangible living heritage: Politics on foodways and marine life conservation," the first Conference of East Asian Environmental History (EAEH2011), Academia Sinica, Taipei, on October 25, 2011.

(12) 赤嶺淳, 「沿岸資源の利用と管理をめぐる同時代史的理解は可能か?: 人類学的フィールドワークの課題と展望」, 第3回「グローバル社会を歩く」研究会, JICA なごや地球ひろば, 2011年9月28日.

(13) Akamine Jun, "Die in peace and come back again: Functions of memorial services for wildlife in marine resource management in Japan," International Symposium on Society and Resource Management 2011, June 13 to 17 at Kota Kinabalu, Malaysia, on June 15, 2011.

(14) 長津一史, 「パネル趣旨説明 島嶼部東南アジアの開発過程と境域—アイデンティティの再構築をめぐる」, 『東南アジア学会第85回研究大会』, 北海道大学高等教育推進機構.

(15) 長津一史, 「マレーシア・サバ州の跨境社会における開発の政治過程—サマ人の自己表象に着目して」, 『東南アジア学会第85回研究大会』, 北海道大学高等教育推進機構, 2011年6月12日.

(16) 赤嶺淳, 「『ナマコを歩く』とその後—「学問の同時代史的視座」の意義」, 第4回環境政策史研究会, キャンパスイノベーションセンター (田町) 6F, 2011年4月15日.

〔図書〕 (計14件)

(1) Akamine Jun, 2013, *Conserving Biodiversity for Cultural Diversity: A Multi-sited Ethnography of Sea Cucumber Wars*, Tokai University Press, 286pp.

(2) 赤嶺淳編, 2013, 『グローバル社会を歩く—かわりの人間文化学』, 新泉社, 368頁.

(3) 赤嶺淳, 2013, 「フィールドワークの可能性を拓く」, 赤嶺編, 『グローバル社会を歩く』, 新泉社, 3-10頁.

(4) 赤嶺淳, 2013, 「ともにかかわる地域おこしと資源管理—能登なまこ供養祭に託す夢」, 赤嶺編, 『グローバル社会を歩く』, 新泉社, 20-71頁.

(5) 赤嶺淳, 2013, 「グローバル社会のフィールドワーク」, 赤嶺編, 『グローバル社会を歩く』, 新泉社, 340-350頁.

(6) 赤嶺淳編, 2013, 『バナナが高かったころ—聞き書き 高度成長期の食とくらし 2』, グローバル社会を歩く研究会, 202頁.

(7) 赤嶺淳監修, 2013, 『海士伝 隠岐に生きる 聞き書き 島の宝は、ひと』, グローバル社会を歩く研究会, 162頁.

(8) 長津一史, 2012, 「インドネシアの二〇〇〇年センサスと民族別人口」, 鏡味治也編, 『民族大国インドネシア—文化継承とアイデンティティ』, 木犀社, 37-48 頁.

(9) 長津一史, 2012, 「異種混濁性のジェネオロジー—スラウェシ周辺海域におけるサマ人の生成過程とその文脈」, 鏡味治也編, 『民族大国インドネシア—文化継承とアイデンティティ』, 木犀社, 249-284 頁.

(10) 赤嶺淳, 2012, 「従乾貨海參看世界」, 張展鴻編, 『上環印記』, 香港: 野外動向有限公司, 23-32 頁.

(11) 赤嶺淳, 2012, 「食文化継承の不可視性—稀少価値化時代の鯨食文化の動態」, 岸上伸啓編, 『捕鯨の文化人類学』, 成山堂, 207-224 頁.

(12) 赤嶺淳・森山奈美編, 2012, 『島に生きる—聞き書き 能登島大橋架橋のまえとあと』, グローバル社会を歩く研究会, 191 頁.

(13) 赤嶺淳編, 2011, 『クジラを食べていたころ—聞き書き 高度経済成長期の食とくらし』, グローバル社会を歩く研究会, 214 頁.

(14) 赤嶺淳 (童琳・陳佳欣訳), 2011, 『海參戦役—従現場思考生物多様性與文化多様性』, 台北: 群學出版, 384 頁.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
出願年月日:  
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:  
発明者:  
権利者:  
種類:  
番号:  
取得年月日:  
国内外の別:

[その他]

ホームページ等

<http://www.balat.jp/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

赤嶺 淳 (AKAMINE JUN)  
名古屋市立大学・大学院人間文化研究科・  
准教授  
研究者番号: 90336701

### (2) 研究分担者

長津 一史 (NAGATSU KAZUFUMI)  
東洋大学・社会学部・准教授  
研究者番号: 20324676